

# 豊臣期から徳川期にかけての大坂の産業分布の変遷(予察)

－発掘調査成果と『難波丸』、『難波丸綱目』との比較から－

杉本 厚典

---

**要旨** 考古学の調査成果と大阪案内記を比較して、近世大坂の産業分布について検討した。

その結果、産業によって市街地に生産の場がとどまるもの、市街地の外縁部へ移動するものとに区別することができた。鋳物や瓦・陶器といった窯業、ベンガラ生産は18世紀以降、市街地の外縁部に移動した産業であった。一方、金属関連の産業の中でも銅の精錬は東横堀や長堀の堀川沿いに、鍛冶は消費地の多い所に生産の場があり、骨細工や硯などは市内各所で製作された。大坂城下町の市街地が拡大する状況で、生産物と生産規模によって、立地に変化が生じていることを具体的に描き出すことができた。

---

## 1) はじめに

江戸時代の都市大坂の商業・産業について、正司考祺は『経済問答秘録』の中で、大坂の職人・商人が「同職就居」しており、その事例として書籍：心斎橋筋、菓種：道修町、金物：菓鐘町、陶器：横堀、細工物：御堂筋などを挙げ、宮本又次は「大阪の商業の特色は同業者が同一地区に集団的に店舗をはっていたこと」を特徴とした。その後、小林茂・脇田修（1973）によって、『難波鶴』記載の船場地域の諸産業の位置が示され、「大坂産業地図」として広く用いられている（今井修平1989）。脇田修（1994）は日用品が船場の中心地に分布するのに対して、鉄関係の加工業が「堺筋、阿波座、天満などに集まっており、ほぼ船場の中心をはずして、その外縁部に広がって」おり、「堀川を利用して原料輸送の便をはかるとともに、公害産業としての隔離をはかっている」（脇田修1994、p.93）と述べ、「外縁部に火を使用したり重量のある物資を扱う加工業者が多い」（p.94）と、産業分布に関する確かな見解を示している。その後、このような産業全般を扱う研究は少なく、両替商（中川すがね2003）、白粉商（池田浩二2001）など、個々の分野に限定される傾向にある。

筆者は船場地域だけでなく船場、西船場、島之内、上町に範囲を広げて、GISの手法で産業マップの作成を行った（杉本厚典2014）。これは大阪案内記の一つ『難波丸』記載のデータをもとに分布図を描いたものであり、この作業によって、同職集住の傾向がより明らかになっただけでなく、船や刀等の高度な技術を要する製造業では、職人や問屋が近接して居住しており、協働してものづくりを行っていた可能性を示した。この研究を通して、諸産業が都市空間の中で機能的な配置をとっていたとの見方を強め、「同職就居」から一歩進めて、諸産業のつながりを重視した産業マップの必要性を説いた。『難波丸』・『難波丸綱目』などの大阪案内記は、利用者の便を図って多種類を取り扱い、そ

のため市中の代表的な店や工房、問屋街のみを紹介している可能性が高い。案内記以外の商業資料で補うことも必要であるが、まったく別の研究分野、即ち、考古学の発掘調査成果を統合した産業マップが必要である。

2015年、大阪歴史博物館の特別展「大坂－考古学が語る近世都市－」の展示に関連して『大坂 豊臣と徳川の時代』が出版され、この中の「第Ⅳ章都市の産業」で大坂の産業についての考古学の調査がまとめられた（大阪歴史博物館・大阪文化財研究所2015）。同書で取り扱われているのは金属加工業、瓦生産、陶器生産、硯製造業、墨造り、骨・角細工、ベンガラについて簡単に紹介され、発掘品から製作工程や製品について考察が加えられた。この中で二つの大きな考え方が提示されている。一つは、金属産業の種類と分布に関する検討をもとに、「大量の原料や燃料を運搬する必要のある銅精錬や鑄造は、水運の利がある場所で操業される傾向が強く、鍛冶や銅細工は、より消費者に近い場所で営まれていた」（大庭重信・伊藤幸司2015、p.164）とする見解である。火を使い、煙の出る産業は市街地の外縁に分布するとしたこれまでの考え方を、原料調達と需要の視点から整理されている。またもう一つは、瓦屋町遺跡の発掘調査から、瓦と共に陶器やミニチュア土製品、鑄物、ベンガラなどが生産されていた状況を踏まえ、「異なる産業であっても、原材料の需給関係や職人間の製作技術の伝授、生産施設の提供など、さまざまな面での密接なつながり」を持っていたとし（清水和明2015 pp.162-163）、共通ないし類似する技術が、各種の産業を集積した一因とする考え方である。これらの研究は、考古学の発掘調査から得られた製作や輸送にかかわる具体的な資料をもとにして、産業分布に関する新たな視点を開く可能性を示している。

本稿では発掘調査で明らかにされた各産業を分布図として描きだして、全体的な傾向と変遷を検討する。さらに『難波丸』・『難波丸綱目』（延享四年・安永六年）と比較し、その異同について整理したうえで、豊臣期から徳川期にかけての産業分布の変遷についての特徴について考察してみたい（注1）。

## 2) 検出された遺構・出土遺物からうかがえる生業・手工業生産

最初に発掘調査で明らかにされてきた大坂の産業について概略する。

### 銅の精錬（図1）

金属加工関連の遺構には炉や甗炉、遺物には羽口、鑄型、坩堝、トリベ、炉壁などがある。またスラグには鉄滓、銅滓、ゆりかすなどがある。

銅精錬に用いた炉は OS90-142（内淡路町 2-4-10）、OS05-05（東高麗橋31-1）、DB91-01（島之内1）で検出されている。また17世紀前葉の OS91-78（船越町 2-46・47）では銅精錬の際に生じるゆりかすが、また、17世紀代の OS90-15（内淡路町 3-1-2）では多量の銅滓、18世紀後半の WR08-01（瓦屋町 1-3）ではカラミ（銅精錬）が出土しており、いずれの調査地においても付近で銅の精錬が行われたと考えられている。

徳川初期の OS90-142では17世紀初頭の溝 SD01から銅滓粒が出土し、17世紀前半の銅滓層が検出された他、17世紀中葉～18世紀後半の小型炉11基、炉の残欠 5 基が見つまっている。また土壙 SK35

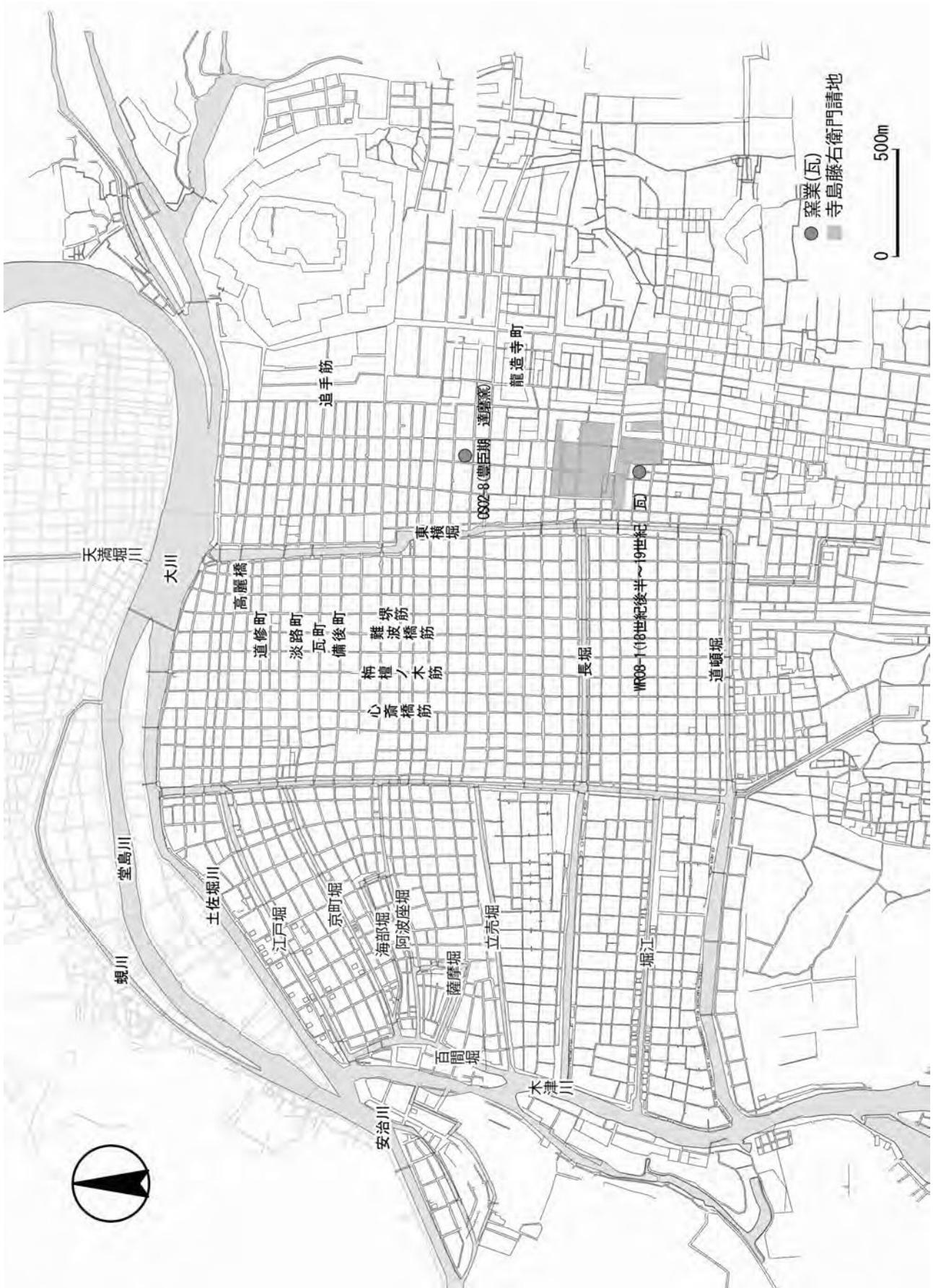


図1 金属加工業（銅精錬業、鍛冶、鋳物）

からは南蛮吹・灰吹炉の蓋が出土しており、この場所でも銅の精錬がなされていたことがうかがえる。

17世紀第2四半期～17世紀後半のOS05-05では合吹き炉が検出されており、銅精錬を行ったことが明らかにされている。さらに17世紀から19世紀にかけて操業されたDB91-01の住友銅吹所跡では、炉関連部品の他、製品の棹銅も出土している。

### 鍛冶 (図1)

豊臣前期とされる鍛冶炉がOJ92-18 (道修町1丁目)で検出され、鍛造剥片もまとめて出土している。豊臣後期の可能性のあるOJ05-10 (瓦町1丁目1-4他)では、鑄型、鑄型焼成用の支脚、埵塙、トリベなどが出土せず、羽口と炉のみが出土しており、鍛冶関連の遺構と考えられる。

NW10-04 (法円坂1丁目)では徳川初期の鍛冶工房が検出されている。工房は覆屋を持つもので、内部が東・中・西部に分かれている。鍛造の対象を加熱するための炉と鍛錬を行う鉄敷の痕跡、焼き入れを行う水槽の痕跡がセットで検出されている。水槽の痕跡は木枠を巡らせたと考えられるものであり、長さ1.06m、幅0.3m、深さ0.11mである。水槽は鍛冶炉の傍にあることから、焼き入れに用いたと考えられており、水槽の痕跡の形状から細長い刃物が想定される。また、未使用の木製の鋏先が炉の傍から出土しており、これを型にして鋏先が製作されたと考えられている (大庭重信2011)。

OJ12-08 (久太郎町2丁目)では18世紀の箱型土塙が検出されている。この土塙は東西方向1.5m、幅0.5m、深さ0.4mであり、内面に厚さ0.1mの粘土を貼り、土塙底から0.2mの位置に直径10cmの羽口を置くものである。炉の北内壁面と底面は溶融してガラス質となっていた。細長い炉である特徴から刀鍛冶を行ったものと推測されている。

### 鑄物・その他の金属加工・細工 (図1)

豊臣前期において、OJ91-02 (平野町1-5他)、OS86-20 (道修町1-7)、OS88-121 (谷町2-35-4・47-3)、OS89-148 (東高麗橋15-1・4)、AZ87-04 (道修町1-3)、NW08-02 (法円坂1)、OS05-03 (谷町4)、大坂城3A区 (大手前3丁目)、大坂城7B区 (大手前3丁目)などで鑄型や埵塙などが出土している。

OS86-20では炉壁や羽口に加え、犁先・鍋の吊耳の鑄型の他、擬宝珠状や半球形の部品を製作する鑄型が出土している。またOS89-148では砲弾とみられる鑄型が見つかった。大坂城3A区では建物5や土塙321に伴って鑄型が出土しているが、細かい破片の状態であるために、鑄造された製品は不明である。

鉄の鑄物以外にも様々な金属を溶かして加工がなされていた。大手筋沿いに位置するOS88-121では金・銀・銅・鉛などの金属を使用した鑄造が行われていたようで、小判形の開放形の鑄型が出土している。また、付近のOS05-03では「鑷 (錫)」の荷札木簡が見つかった。錫を用いた製品や合金の可能性が想像される。大坂城南西部の大坂城7B区では100点あまりのトリベが廃棄された「トリベ集積遺構」が検出され、トリベの中に金の粒をもつものが41点と半数近く認められた。また大坂城南側のNW08-02では、埵塙に付着する金属分析から、銅・青銅・真鍮などを用いて合金を行っていたとみられる。

豊臣後期 (～徳川初期) においてはOJ09-02 (平野町1-2-1)、TJ08-03 (天神橋1-27-1・74

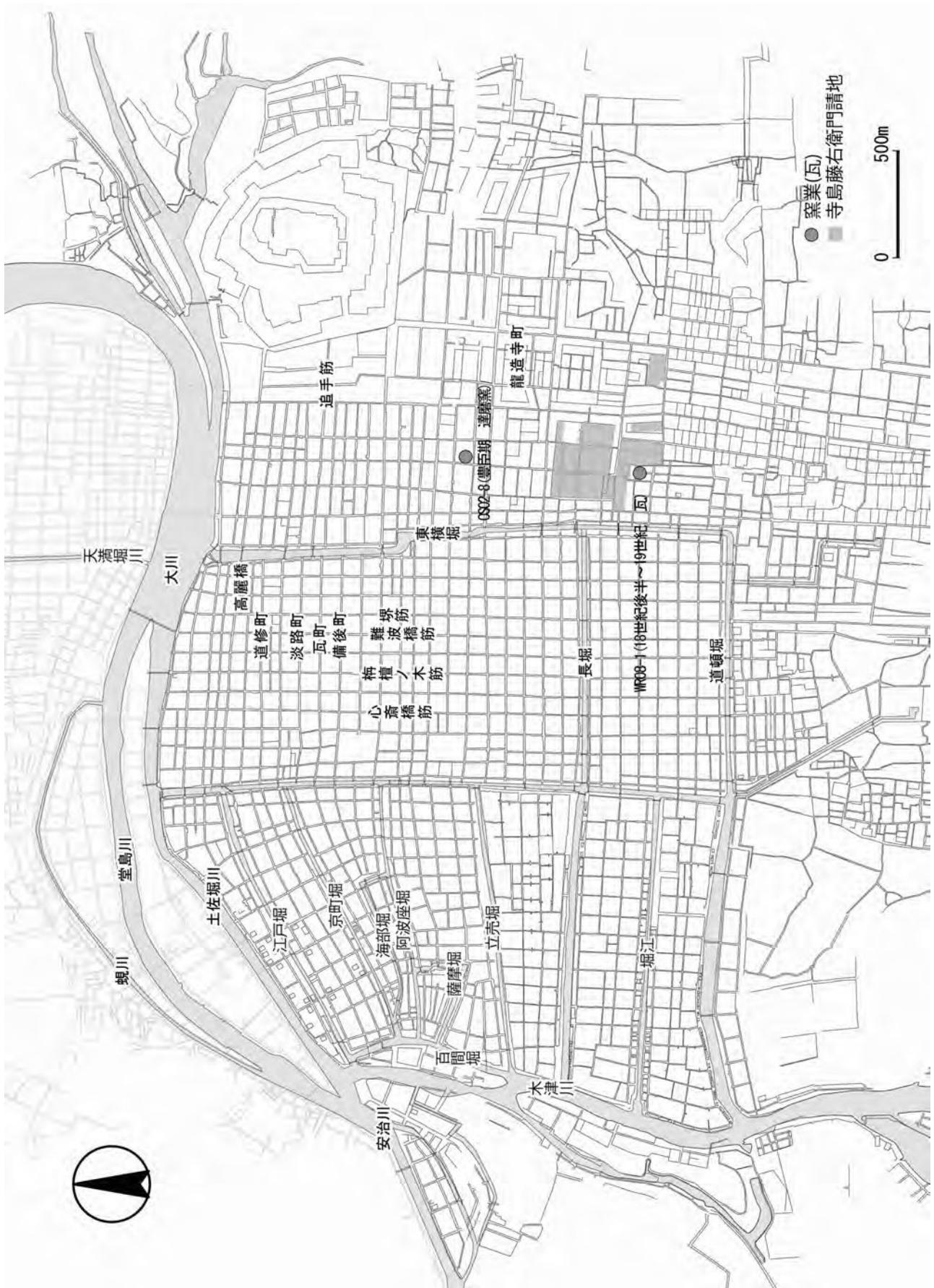


図2 窯業(瓦)

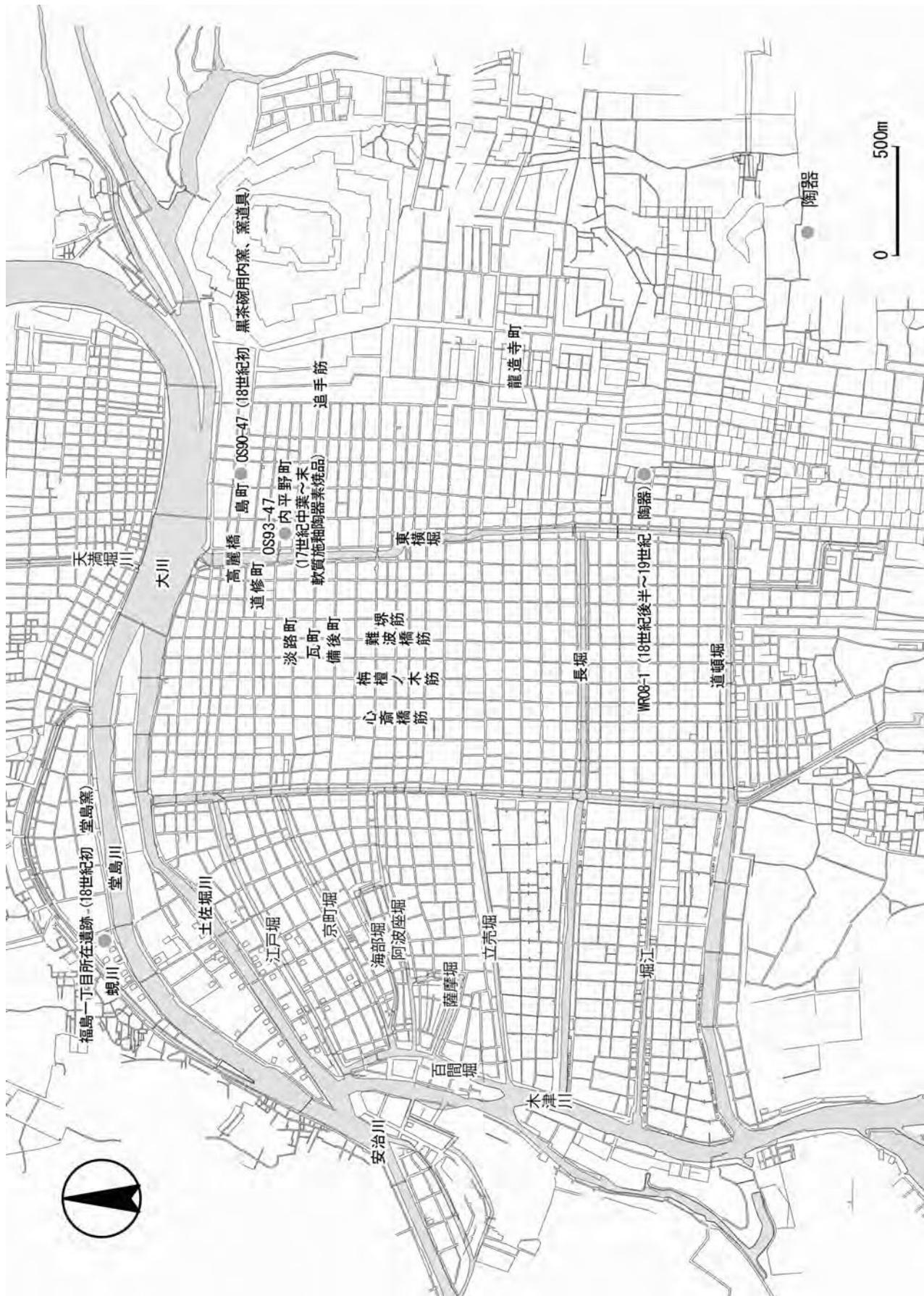


図3 窯業 (陶器)

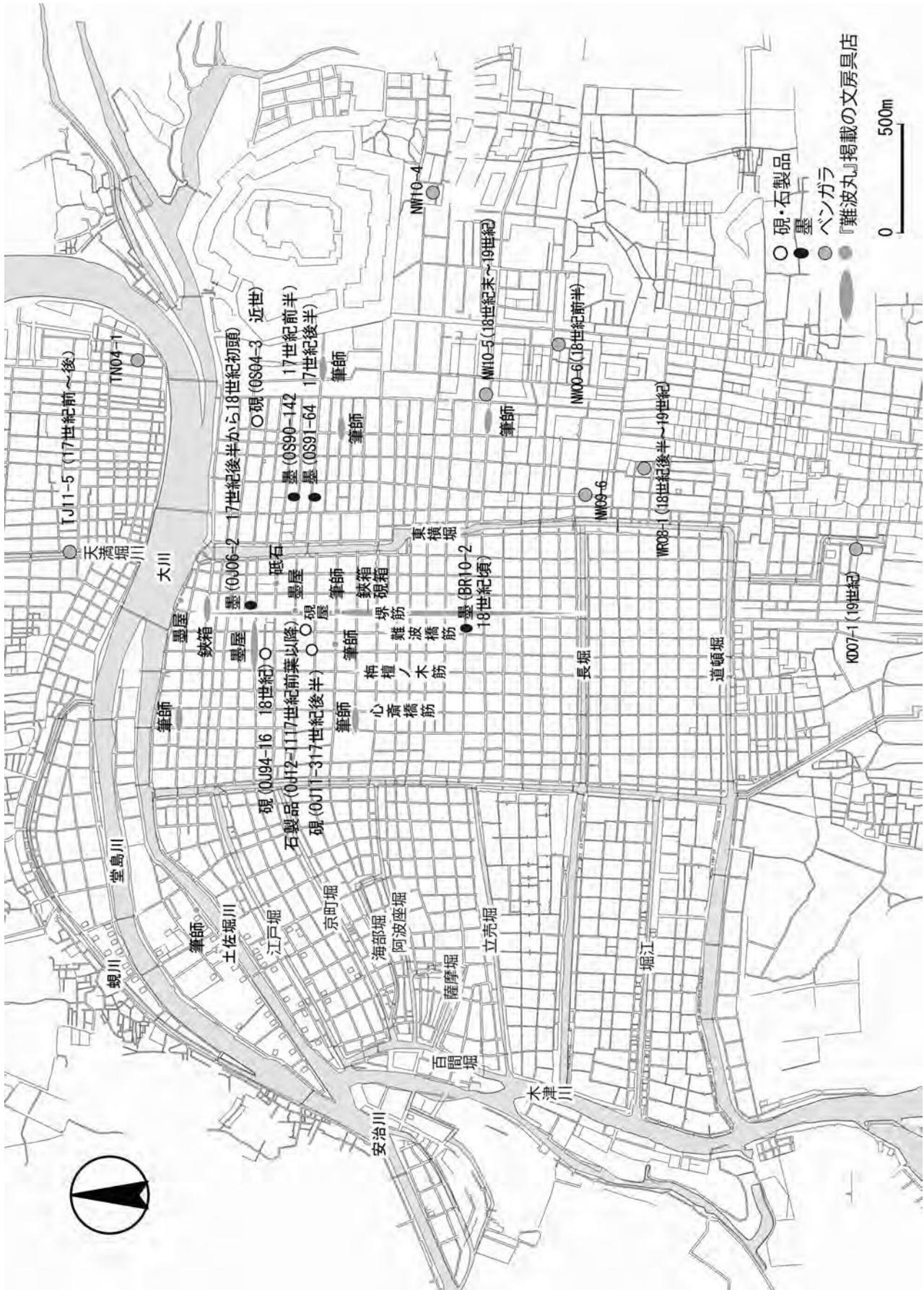


図4 硯・墨・ペンガラ製作と文房具店

の各一部・7)、大坂城7B区(大手前3丁目)で鋳型や坩堝が出土した。OJ09-02・TJ08-03では坩堝に付着した金属の分析から、真鍮を用いた金属加工が行われたことが明らかにされている。また大坂城7B区では鍋の可能性のある湾曲部をもつ鋳型や環状粗型が出土している。

17世紀後半のHS99-02・00-01(中之島4)では、船人が設けられる前に金属加工を盛んに行っており、鋤・羽釜・鍋(以上、鉄鋳物)・鏡(銅鋳物)などの鋳型や、素材を溶解するための甌炉などが見つかっている。

OS93-28(常盤町1丁目)では17世紀後半から18世紀初頭および18世紀前半の羽口や鉄滓を捨てた土壌が検出され、未使用の小型把手付坩堝などが出土している。坩堝に付着する金属は銅と亜鉛であり、真鍮の合金を作ったと考えられている。常盤町1丁目は刀鍛冶が多く居職していたことが知られ、合金を用いて、装飾性の高い目貫や鏝等の刀装具を製作していた可能性もある。

18世紀後半～19世紀前半のWR08-01(瓦屋町1-3)では半鐘・鰐口(銅鋳物)などの鋳型が出土し、18世紀末～19前葉のOJ95-04(南本町2-38-3、39-1・2)では煙管の鋳型が見つかっている。その他、OJ92-33(瓦町2-50-1・2、55-7)では銅の切り屑が多く出土しており、これらを再利用した手工業生産が、敷地の奥側において営まれていたと考えられている。

### 窯業(図2・3)

豊臣期ではOS02-08(和泉町1-1-31(南大江小学校))で達磨窯と桐紋木製瓦範が出土しており、豊臣期大坂城で用いる瓦を焼成していたと考えられている。

OS92-19(内平野町3)、OS93-47(内平野町3・内淡路町3)では17世紀中葉～末にかけての軟質施釉陶器の素焼きの品が出土している。17世紀末～18世紀初のFK98-01(福島1)では連房式登窯1基と桶窯2基が検出され、前者では京焼系の硬質施釉陶器の他、播鉢・土人形等が焼成されていた。後者は本焼きする前の素焼き、あるいは軟質施釉陶器を焼成した窯と考えられている。18世紀初頭のOS90-47(島町2-21)では窯道具や多くの小孔を入れた円筒形の内窯が出土し、黒茶碗を焼成したことが推測されている。

18世紀後半～19世紀前半のWR08-01(瓦屋町1-3)では窯跡そのものは検出されていないが、「神呪寺灌頂堂」の瓦質瓦範や支脚型窯道具の他、瓦の失敗品も出土している。さらに瓦だけでなく18世紀後半以降の陶器土型や未成品が見つかっており、陶器類も焼かれていた。さらに19世紀のOS07-01(清水谷町17-10・11)では包含層から窯道具が出土しており、付近で窯業が行われていた可能性がある。

ここで火熱を伴う産業である金属業、窯業についてまとめておく。豊臣期の大坂城築城や屋敷普請のための鍛冶や鋳物、瓦窯は大坂城南西部に設けられていた。豊臣期において、町人地は島町から高麗橋にかけての東西道路が当時のメインストリートであり(松尾信裕2015)、東横堀開削前の豊臣初期段階では、島町から大川にかけての場所で砲弾や鍋(OS89-148(東高麗橋))が、また豊臣前期になると東横堀の西岸のOS86-20(道修町1)で、犁先や鍋などが鋳造されるようになった。

こうした街中での火を用いる産業は、防災上、建物の並ぶ町から離れた場所が望ましいが、金属業は材料の搬入や流通に適した場所、そして需要の高い場所で行われていたことが特徴である。それに

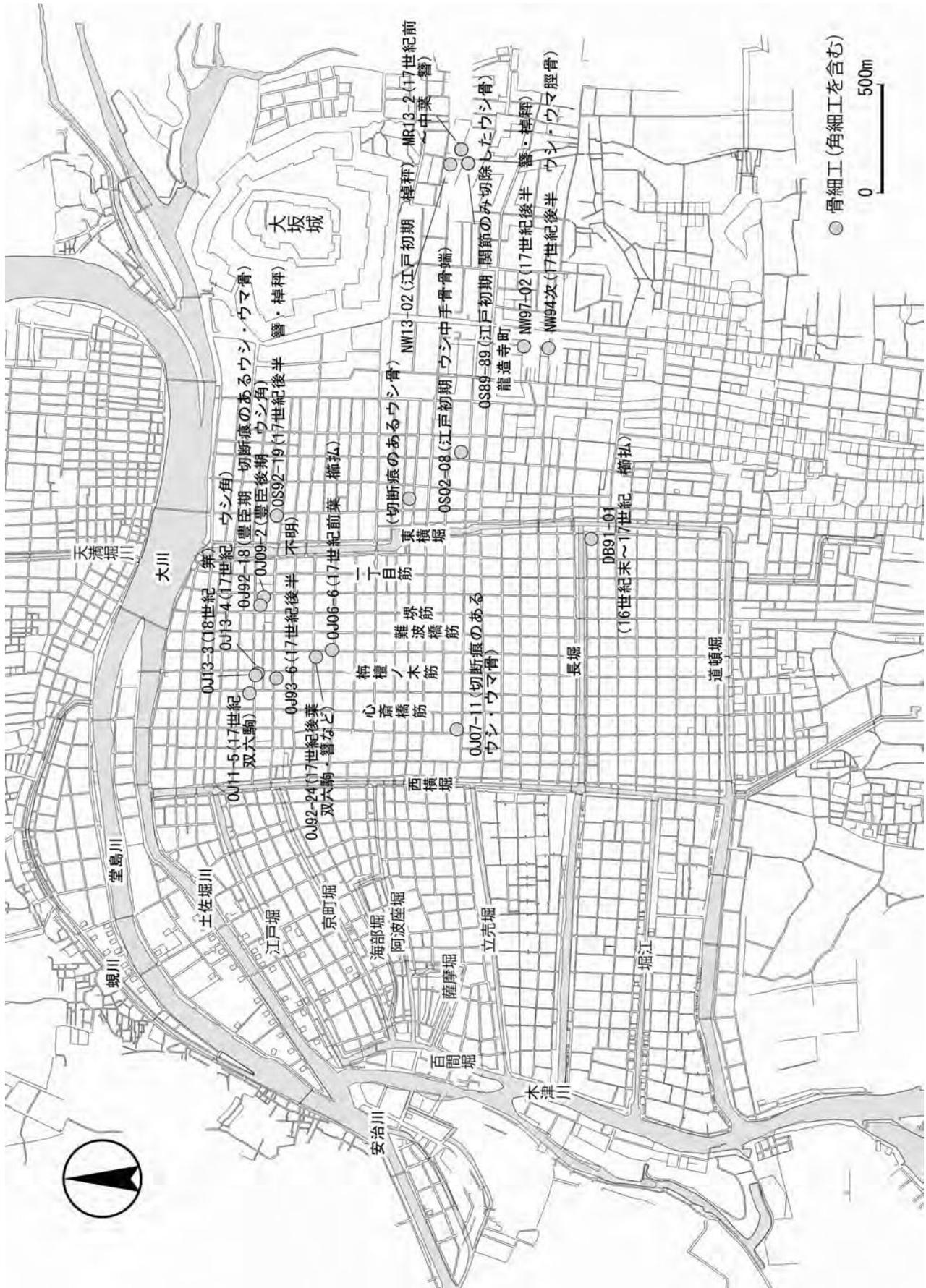


図5 骨細工

対して豊臣期の瓦窯は、それらが設けられた場所の周辺において豊臣期の遺構は少なく、操業されていた時期は、まだ市街地化されていなかったとみられる。

江戸時代において、大坂城の南西部に加えて南部でも金属業が行われていた。とりわけ大坂城南部の鍛冶工房では多くの鍛冶炉が設けられており、鋏などの大坂城再建のための道具が生産されていたようである。精錬に関する遺構・遺物が東横堀東側の内両替町や内平野町で多く見られ、内平野町・内淡路町では軟質施釉陶器の生産も行われていた。やや遅れて18世紀においても島町二丁目で黒茶碗が焼かれており、東横堀に近い場所では市街地に取り込まれるようにして火を使う産業が残っていたことがうかがえる。しかし18世紀頃から窯業や金属業が上町台地の西縁で市街地の外縁にあたる瓦屋町に設けられるようになり、中之島でも17世紀後半には鉄や銅製品の鑄造がなされていたが、広島藩蔵屋敷が設けられる頃には操業が停止する。

#### ベンガラ (図4)

ベンガラ製作時に使ったと見られる内面にベンガラが付着した焙烙が出土する場所をベンガラ製作の場所と考えている。17世紀に遡る内面ベンガラ付着焙烙は無いが、TJ11-05 (南森町1-2-9)では土壌中からベンガラとみられる顔料が検出されている。

18世紀後半～19世紀前半のWR08-01 (瓦屋町1-3)では内面ベンガラ付着焙烙が多数出土している。18世紀末～19世紀代とみられるNW10-05 (内久宝寺町2-36-25他)では内面ベンガラ付着焙烙が出土しているが、1点であるため、その場所で製作されていたかどうかは不明である。

19世紀になると高津御蔵の跡地でベンガラ製作が行われた(KD07-01 (高津3-17-6))。焙烙に残るベンガラの発色が良いことから、緑礬(硫化鉄鉱石原料)を原料にしたものと推測されている。その他、OS09-06 (谷町6-5)、OS11-07 (内久宝寺町3丁目20・21)、TN04-01 (天満1-8)でも内面ベンガラ付着焙烙が出土している。

#### 墨 (図4)

煤を採集するための油煙受皿が出土している場所を墨製作の場所と考える。

17世紀前半のOS90-142 (内淡路町2-4-10)、17世紀中～後半のOS91-64 (大手通16-1・2)、17世紀後半から18世紀初頭のOJ06-02 (道修町1-6)、18世紀頃のBR10-02 (南久宝寺町2-21-乙)で、それぞれ油煙受皿が出土している。

OS91-64 (大手通16-1・2)の調査では100点以上もの油煙受皿が出土し、BR10-02 (南久宝寺町2-21-乙)でもまとまった数の油煙受皿が見つかっており、盛んに墨が製造されていたことがうかがえる。

#### 石製品・硯 (図4)

17世紀中～後葉のOJ12-11 (淡路町2-14-2～瓦町2-71-6)では粘板岩の板石が出土しており、硯の素材である可能性が指摘されている。また、研磨用の砥石や、素材や廢材もまとめて出土しており、付近で石製品が製作されたとみられる。

17世紀後半のOJ11-03 (瓦町1-41)では灰白色および黒灰色の粘板岩で作られた硯と、未成品・素材が出土し、17世紀後半～18世紀初頭のOJ94-16 (道修町2-6-27・28)では、硯とその未成品、

素材、および砥石が見つまっている。その他、近世としか判明していないが、OS04-03（島町1丁目21）においては硯の未成品が出土している。

#### 骨細工（図5）

豊臣後期のOJ09-02（平野町1-2-1）では灰・炭が大量投棄され、その中からウシの角が出土した。豊臣期から江戸時代初期においては住友銅吹所（DB91-01（島之内1））の下の地層で櫛払の未成品が出土しており、OJ92-18（道修町1）では切断痕のあるウシ・ウマの骨が見つまっている。

また江戸時代初期にはOS89-89（森ノ宮中央2-4-2・3・19）において関節部分を取り払ったウシの長骨が出土し、NW13-02（森ノ宮中央2-6-1他4筆）では棹棒の失敗品や素材が、豊臣期の達磨窯が見つかったOS02-08（和泉町1-1-31（南大江小学校））では豊臣期の達磨窯の上に盛られた厚い整地層の上面において、骨細工の材料であるウシ中手骨の骨端がまとまって出土している。

17世紀前葉のOJ06-06（備後町2）では櫛払が出土し、廃材や素材、未成品などを伴っていた。17世紀前半～後半のOJ11-05（道修町3-2-1他）では双六駒の未成品をはじめ、素材や加工屑、廃材・失敗品などが見つかった。

17世紀後半のNW94次（龍造寺町）では簪・棹秤の素材が出土し、その50m北のNW97-02（龍造寺町9-1番地）では、土壌からウシ・ウマの脛骨がまとまって出土しており、棹秤の素材であった可能性が指摘されている。

さらに17世紀末～18世紀初頭において、ボタン状の製品が製作されたことがOJ12-09（北久宝寺町2-5-15）の調査から明らかにされている。近代になると貝ボタンの未成品がDK09-02（大国1丁目130番9外）等で見つまっている。

豊臣期において骨細工が行われていた現在の平野町1丁目、道修町1丁目、島之内1丁目は城下町外縁部にあたる。また森ノ宮中央や和泉町1丁目なども、江戸初期にはまだ市街地化していない。豊臣期や徳川初期には市街地外縁部で骨細工がなされていたが、江戸時代には小間物や遊戯具、秤などの製作が船場、上町に広がり、かつ分散して製作されるようになったといえる。また、市街地において骨細工がなされていたOJ06-06調査地、OJ11-05調査地では、敷地の奥で骨細工に関する遺物や遺構が見つまっている。同調査地で通りに面した所の調査はなされていないため確定することはできないが、骨細工関連の遺物・遺構の分布傾向から、通りに面した「表」と、奥まった「裏」とでは住人の職業が異なっていた可能性があるだろう。

#### 木製品

豊臣前期のOS08-05（本町橋25-3・34-2）では桶・木釘等の他、鼻繰や加工木が多数出土している。また、17世紀後半のOJ08-04（淡路町3丁目53・60・73-1の一部）では土壌から大量の大鋸屑が出土しており、木製品の加工の他、建築材料を加工する板挽を行っていた可能性も考えられる。

### 3) 『難波丸』、『難波丸綱目』から読み取れる産業分布と考古資料との比較

次に『難波丸』、『難波丸綱目』から考古資料と比較できる産業を抽出して検討する。

銅の精錬

銅精錬は『難波丸』では、「あはぢ町一丁」・「長堀四つ橋」・「四つばし」・「道頓堀」・「米や丁」、『難波丸綱目』（延享四年）では「茂左衛門町」・「すみや町」等、『難波丸綱目』（安永六年）では「よしのヤ丁」・「心斎橋筋等」とある。この産業が長堀、東横堀、道頓堀といった大坂城に近い堀川沿いで継続的に行われていたことがうかがえる。

表1 難波丸 難波丸綱目（延享四年） 難波丸綱目（安永六年）掲載の諸職

名称	元禄十年	延享四年	安永六年	備考
墨屋	道修町・境筋淡路町・北浜一丁メ	南久宝寺町堺筋・錦町二丁目		商人買物独案内(天保三年(1832))に追手筋錦町に岡本古松堂
硯屋	さかいすぢ	堺筋	堺筋	
碁石	瓦町八丁メ	塩町一丁目・堺筋	塩町一丁目筋・堺筋	
砥石	東横堀平の町	東横堀本町より北へ	東横堀	
砥石問屋	今橋浜・高らい橋浜			
石塔	西横ぼり・松屋町筋	松屋町筋・西横堀・天満堀川	西横堀・松屋町筋・長堀	
石臼	西横ぼり	西横堀・京町堀より北へ・阿波座堀より南へ	西横堀・京町堀北へ・阿波座堀	
石工	西横ぼり・松や町すじ・長堀四つばし・天神橋石やノ浜	西横堀・長堀	西横堀・長堀・松屋町筋	
石屋	丹波や町	西横堀・長堀	高麗橋・本町呉服町・天神橋・嶋之内	
難波焼器	道頓堀			
土焼物類	道頓堀ノ堀詰	松屋町筋・南瓦屋町		
土火鉢	松や町筋・御霊ノ前	松屋町筋・南瓦屋町	松屋町筋・南瓦屋町	
土人形	御堂前	松屋町筋・南瓦屋町	竈持六軒・天満市之側・御堂前	
かハラヤ	松屋町すじ		天神橋筋・瓦屋町・福島	
土瓶・同ふる此外すやき物			高津辺所々二有	
すやき物			南瓦屋町・高津	
楽焼物			天王寺・松屋町筋・瀬戸物町	
いまり焼物問屋	せと物丁・せと物丁西横堀・せんだんノ木ぐミ・ふし三堀二丁メ			
いまり瀬戸物屋	西横堀・伏見堀南が八・さつま堀			
瀬戸物	西横ぼり・伏見堀南が八	西横堀・瀬戸物町	西横堀	
角細工	さいや町	淡路町・瓦町・井池筋	井池筋・備後町	
鯨細工		玉造伊勢町	玉造所々・井池筋・北久太郎町・米屋町・梅檀木筋	
べつかうや	藤ノ棚	平野町中橋より西・高麗橋筋	平野町筋・高麗橋筋・安堂寺町・博労町・南久宝寺町・北久太郎町・難波橋筋	
象牙や	平の町せんだんノ木	井池筋・淡路町・瓦町		
双六ノさい	さいや町			
秤屋	高麗橋一丁メ		高麗橋一丁目	
花かんざし			安堂寺町・順慶町筋	
べんから煮土(弁柄煎土)	平野町	平野町濱	高津・安堂寺町・籌屋町	
さび土	道頓堀ノ堀詰(さびつち表塗ノ土)	内骨屋町筋・南御祓筋	内骨屋町筋・南御祓筋・船場所々	

名称	元禄十年	延享四年	安永六年	備考
挽板屋	あんどうじ町・南新町(挽板は座摩ノ前町・西横堀)	安堂寺町難波橋より西へ	安堂寺町難波橋より西・西横堀	
受領鍛冶並直付 刀脇指	常磐町・錦町・錦町一丁目・内本町東・鑓屋丁・伏見両替町・伏見町・内骨屋町・久太郎町二丁目・上久宝寺町・蠟燭町・内平野町・籠や町・南革屋丁・谷町・松尾町・本町・上本町一丁目・南新町・納屋町・折屋町	トキ八町一丁目・トキ八町二丁目・内平野町二丁目・伏見両替町・本町上三丁目・玉造・上本町八丁目・内木子ヤ町・与左工門丁・内平ノ町・南革ヤ町(南カワヤ丁)・ヤリヤ町・柏原丁・冷水丁		鍛冶
受領鍛冶之外上手分	内平野町二丁目			鍛冶
箭根鍛冶	上平野町三丁目			鍛冶
鍛冶	せんだんノ木過書町・二丁目筋南・かいや町筋ノにし・天満烏井ノ前・あ八ざぼり・北新三丁目			鍛冶
刃物かぢ	天神橋籠ノ辺・天満夫婦池ノ辺			鍛冶
錠鍛冶	せんだんノ木筋南			鍛冶
針鉄屋(針金屋、針鉄や)	道頓堀境筋東・御だうノ前	南鍛冶屋町	嶋ノ内・鍛冶屋町	鍛冶
剃刀鍛冶 並 箭根毛抜大工之道具	内平の町・折や町・牢ノ前			鍛冶
鉄毛抜鍛冶	長堀より三丁目半南			鍛冶
大工鍛冶	久太郎町一丁目筋より順慶町迄		一丁目筋・栴檀木筋	鍛冶
船釘(舟釘)	あ八ざ堀中の	阿波座鍛冶町	阿波座鍛冶屋町	鍛冶
碇鍛冶	新玉作り	阿波座鍛冶屋町	阿波座鍛冶屋町	鍛冶
鉄鋤鍛冶		玉造平野町・稻荷新町・相生東町・天満十丁目筋・阿波座鍛冶町・長町南	玉造平野口・稻荷新町・相生東町・天満十丁目筋・阿波座鍛冶町・長町南	鍛冶
鋳物師	心齋橋・ばくらう町・あ八ざ・あ八ざぼり・いたちぼり	松屋町筋・南瓦屋町・新道	松屋町筋・新道・南櫛屋町	鋳造
鋳物師(仏具)	心齋橋・ばくらう町			鋳造
鋳物師(鍋釜)	あ八ざ・あ八ざぼり・いたちぼり		道頓堀西・一丁目筋・阿波座堀・船場・百間堀	鋳造
金灰吹并諸事金類吹抜所	高麗橋内両替丁	(所付け部分に記載無し)	(所付け部分に記載無し)	精錬
銅ノふきや銅吹や	あ八ざ町一丁目・長堀四つ橋・四つばし・道頓堀・米や丁	茂左衛門町・すみや町他	よしのヤ丁・心齋橋筋他	精錬
脇指新物		一丁目筋		鍛冶・小売?
鑓屋	平野町安土町二丁目	内本町上三丁目・一丁目筋・平野町筋・安土町筋	内本町上三丁目・一丁目筋・平野町筋・谷町筋・栴檀木筋	鍛冶・小売?
小道具屋刀脇指			一丁目筋・栴檀木筋	小売・鍛冶?
鉛屋(棹鉛対馬)	鉛や町・平の町・瓦町一丁目			流通?・精錬?
鉛屋(棹鉛唐鉛)	今橋二丁目			流通?・精錬?
鉛屋		一丁目筋・平野町より長堀まで	一丁目筋	流通?・精錬?
剃刀	さかいすじ			鍛冶・小売?
薄刃庖丁	さかいすぢ	天神門前・九丁目・天神橋筋・堺筋・玉造黒門・鍛冶屋町筋・一丁目筋	天神鳥居筋・堺筋・天神橋北・玉造・八百屋町筋南・一丁目筋南	鍛冶・小売?
釘や(釘屋)	平ノ町	一丁目筋	一丁目筋・天神橋筋・内平野町	鍛冶・小売?
佛具屋		御堂の前・心齋橋筋・一丁目筋・天満九丁目筋	御堂の前・心齋橋筋・高津新道・一丁目筋	小売・鋳造?

また今井典子(2015)は住友家史料をもとに、銅屋、銅吹屋、銅問屋、銅仲買、銅細工人、古銅類取扱業者、真鍮地銅屋・真鍮吹の各職人を集成している。これらの銅関係の職種のなかで、銅吹屋

は元禄五年(1692)、元禄十四年(1701)、正徳二年(1712)、享保八年(1723)の一覧が掲載されており(pp.39-42)、この表によると、銅精錬は長堀、道頓堀における操業が多く、時期が下ってもこの傾向は継続する。

### 鍛冶(図1・表1)

鍛冶は大坂城南西部の錦町から伏見両替町にかけて刀鍛冶が多く操業する。常盤町にあたるOS93-28(常盤町1丁目)調査地は位置的には刀鍛冶の可能性はある。しかし埴塙が出土しており、刀鍛冶のみに限定することはできない。OJ12-08(久太郎町2丁目)では鍛造対象を熱するための炉が細長く、刀を鍛えるための炉の可能性が高い。発見された遺構は18世紀のものとなされ、17世紀には受領鍛冶伊勢守輝国の工房が付近にあったことが『難波丸』に記される。また、OS01-34(内平野町2丁目)では石囲いをしていたと見られる長方形の土壇と、焼土層、鉄滓などが見つかり、鍛冶関連の可能性もある。内平野町には受領鍛冶に次ぐ力量の刀鍛冶が居職していたことが記されている。

刀鍛冶以外にも船釘や船碇、調理、生活などさまざまな刃物、錠などが知られ、整理すると下記のようなになる。

刃物鍛冶：天神橋籠ノ池辺多く常盤町・内本町

船釘(舟釘)：阿波座堀(『難波丸綱目』延享四年)→阿波座鍛冶町(『難波丸綱目』安永六年)

碇鍛冶：新玉造(『難波丸』)→阿波座鍛冶町(『難波丸綱目』延享四年・安永六年)

大工鍛冶は久太郎町一丁目筋より順慶町(『難波丸』)→一丁目筋・梅檀木筋(『難波丸綱目』安永六年)

鋤鋤鍛冶：玉造平野町・稲荷新町・相生東町・天満十丁目筋・阿波座鍛冶町・長町南(『難波丸綱目』延享四年・安永六年)

錠鍛冶：せんだんノ木筋南(『難波丸』延享四年)

刃物かぢ：天神橋籠ノ池・天満夫婦池ノ池(『難波丸』)

針鉄屋(針金屋、針鉄や)：道頓堀境筋東(『難波丸』)、御だうノ前→南鍛冶屋町(『難波丸綱目』延享四年)→嶋ノ内・鍛冶屋町(『難波丸綱目』安永六年)

剃刀鍛冶並箭根毛抜大工之道具：内平の町・折や町・牢ノ前(『難波丸』)

鋏毛抜鍛冶：長堀より三丁半南(『難波丸』)

これらの分布傾向をまとめると、刀は武家地である上町やそれに近い東横堀東側、船関連のものは阿波座堀や新玉造といった大阪湾沿岸部、鋤鋤といった農具は市街地周辺(「天満十丁目筋」・「阿波座鍛冶町」・「長町南」)、包丁、大工道具、錠、それに身だしなみを整える道具類の毛抜きや剃刀などは、消費の多い市街地で製造されていたことがわかる。

発掘調査では豊臣期に大坂城周辺や東横堀川沿岸で行われていた鍛冶が、徳川期に船場にまで拡大し、18・19世紀に上町台地上に移動する傾向がうかがえるが、文献からは市街地でも行われていた可能性が指摘できる。大坂の加工産業の中でも上位を占める鍛冶製品の実態解明のためには、生産地とみられる場所においてより重点的な調査が必要とされる。

### 鋳物・金属加工 (図1・表1)

鋳物師は元禄期には「心斎橋」・「ばくらう町」が仏具の鋳物師、「あはざ」・「あはざほり」・「いたちほり」が鍋釜の鋳物師として記され、種類によって産地が北船場と西船場に分かれていた。延享期には「松屋町筋」・「南瓦屋町」・「新道」、安永期には「松屋町筋」・「新道」・「南櫛屋町」へと、上町台地の西縁が恒常的な産地となっている。

発掘調査では豊臣期から徳川期にかけて、鋳物生産の場所は城下町の北西部に位置しており、城下町の拡大に応じて西に移動していた。その後、瓦屋町で鋳型が出土しており、上町台地西縁へと移動しており、文献と一致する。

発掘調査では、江戸期の住友銅吹所(「長堀茂左エ門町」)の他、豊臣後期から江戸初期にかけて東横堀北東側の高麗橋の南東側で銅の精錬がなされたことが明らかにされている。『難波丸』には調査地付近の「高麗橋内両替丁」において金灰吹並諸事金類吹抜所として「灰吹や九右衛門」の名前が掲げられており、場所や時期的にもこれに近い。

### 窯業 (図2・3・表1)

『難波丸』(元禄十年)には「道頓堀」・「道頓堀ノ堀詰」で難波焼や土焼物類、「松屋町筋」で土火鉢や瓦が販売されていたが、『難波丸綱目』(延享四年)には「松屋町筋」と「南瓦屋町」、さらに『難波丸綱目』(安永六年)には「高津」も加わり、上町台地の西縁部において焼物や瓦が盛んに販売されていた。瓦屋町遺跡は窯業の中心であり、発掘調査成果から、この場所で瓦をはじめ、軟質施釉陶器や瓦器、土人形やなどが生産されていたことが明らかにされている。

焼物や瓦などは重量のある品物であることから生産の場所に近い所でありかつ水運の良い場所で販売された。一方、西横堀およびその沿岸の瀬戸物町では伊万里焼、瀬戸焼が売られていた。伊万里焼は海路で遠方からもたらされた重量のある品であり、海に近く消費地に面した陸揚げの場所である西横堀が商いの場として選ばれたのであろう。

発掘調査では瓦屋町遺跡の他に、堂島蔵屋敷跡(FK98-1(福島1丁目))で窯業を行っていたことが分かっている。いずれも当時の市街地から離れた場所で行われていた。また瓦屋町遺跡では土採場が近くに位置していたことも、この場所で窯業が継続できたことの要因の一つである。

### ベンガラ (図4・表1)

『難波丸』、『難波丸綱目』では、「弁柄煎土」あるいは「べんがら煮土」として、「平野町」(『難波丸』)→「平野町濱」(『難波丸綱目』延享四年)→「高津」・「安堂寺町」・「箒屋町」(『難波丸綱目』安永六年)が記される。東横堀の平野町一帯で行われていたベンガラ製造が、島之内の南側(「高津」)、船場の南側(「安堂寺町」)、東横堀に面した上町の西側(「箒木町」といった、市街地から離れかつ水運の比較的良い場所への移動していったことが読み取れる。

ベンガラ生産に使用したとみられる内面ベンガラ付着焙烙の出土地の分布を見ると天満、上町、瓦屋町、高津等に点在する。高津では18世紀以降、湿気の問題から難波に移転していった御蔵の跡地でベンガラが製造されている。この場所での製造開始が高津入堀川などの水運の良さが指摘されている(田中裕子2014)。御蔵は米の備蓄を目的に設置されたもので、舟運がよいことに加え、火災を避け

るため市街地から離して設けられていた。このような御蔵の立地条件は火を使い煙や臭いの発するベンガラ製造に適していたと言えよう。

#### 硯屋 (図4・表1)

硯屋は『難波丸』(元禄十年)、『難波丸綱目』(延享四年)、『難波丸綱目』(安永六年)においていずれも「堺筋」が挙げられている。発掘調査では堺筋に面した調査地からは硯製作を示す資料は見つかっていない。堺筋に最も近いのは17世紀中～後葉のOJ12-11(淡路町2-14-2～瓦町2-71-6)である。17世紀後半のOJ11-03(瓦町2-41)、17世紀後半～18世紀初頭のOJ94-16(道修町2-6-27・28)では、堺筋よりさらに西に150m程度離れて位置する。またいずれの調査地でも、通りに近い場所ではなく、敷地の奥まった場所から硯の未成品が出土している。

各調査地で発見されている硯の材質は主に粘板岩や珪岩である。粘板岩は硯の他にも砥石に用いられている。そこで、『難波丸』、『難波丸綱目』から砥石に着目すると、砥石が東横堀沿いで販売されており、その流通を扱った砥石問屋は今橋浜および高麗橋浜にあったことが記される。粘板岩は滋賀県湖西地域の高島石、珪岩は京都盆地の清滝石などが著名な産地であり、これらの産地から淀川を下り、大川を経由して東横堀川に入り、陸揚げされたと推測したい。硯や砥石といった粘板岩や珪岩を素材とする製品や、それらを製作するための材料は、東横堀の水運を利用してもたらされ、市中に流通していたと考えられる。一方、同じ石製品でも、主に凝灰岩や花崗岩を材料とする石塔や石臼は、西横堀、長堀で販売され、石工は西横堀、長堀に認められた。凝灰岩は播磨や瀬戸内島嶼部、花崗岩は六甲山地や瀬戸内地域が産地である。海からもたらされたこれらの石材が西横堀に陸揚げされ、西横堀、長堀の石工が加工し、その周辺で販売されていたのだろう。

#### 墨屋 (図4・表1)

墨屋は「道修町」に「吹田や小西」、「境筋淡路町」に「平岡や太平」、「北浜一丁目」に「菱や九郎兵衛」などの名が挙げられている。このうち、17世紀後半から18世紀初頭のOJ06-02(道修町1-6)は道修町の「吹田屋小西」と町名が一致する。17世紀中～後半のOS91-64(大手通16-1・2)は『難波丸』には近い場所の店は見当たらないが、天保三年(1832)の『商人買物独案内』には追手筋錦町に岡本古松堂があったことが記され(小倉2015)、墨を製造・販売していたことがわかる。

#### 骨細工 (図5・表1)

素材を仕入れて、簪、双六駒、秤などに加工したことが発掘調査の成果から明らかにされている。出土品の分布には規則性が無く、また、『難波丸』、『難波丸綱目』に記されている花かんざし、秤の製作・販売場所とは一致しない。硯もそうであったが、素材や半製品が見つかったのは敷地の奥であり、通や筋に面した「表店」で無く、「裏店」にあたる。筋や通りに面した表店は商品販売の店舗で、裏店には各種の内職を行う人や隠居した人などが借家していた可能性が高い。近代の内安堂寺町2丁目の事例では、裏借家の職業として袋物職、人形職、筆職などの内職が多いことが知られる(深田智恵子・松岡弘之2009)。こういった内職で作られた製品が、買次問屋(仲買)を経て、道に面した表店に店舗を持つ商人にわたったことも考えられる。『難波丸』などが商業案内としての性格であるため、販売場所が記載されていても、製作の場については必ずしも記されていない。販売の場と異なる

場合、発掘調査で見つかる出土地点が必ずしも『難波丸』などに記載されていないこともある。骨細工や硯の未成品の分布は市中各所で小規模な生産が展開していたことを示している。

#### 木製品

発掘調査では OJ08-04 (淡路町三丁目) から大鋸屑が大量に出土している。大鋸屑に関連した産業として、挽板屋や大鋸木挽等がある。大鋸木挽は総数が2,317人に上り、これに従事する者が非常に多かった。『難波丸』には挽板屋として「あんどうじ町」・「南新町」、挽板として「座摩ノ前町」・「西横堀」が挙がる。『難波丸綱目』(延享四年)では「安堂寺町難波橋より西」、『難波丸綱目』(安永六年)では「安堂寺町難波橋より西」・「西横堀」とある。材木問屋は西横堀に多く、これらに近い西横堀から南船場にかけての場所で木材加工が盛んに行われていたことがうかがえる。

#### 4) まとめ

以上のように、発掘調査で検出された産業の分布と『難波丸』、『難波丸綱目』からうかがえる産業分布の対比を行った結果、次のことがわかった。

- 1、瓦やベンガラ、陶器、墨の生産では出土資料と文献とで一致する点が多く見られた。
- 2、鍛冶は文献からは製品の主たる消費地に近接して生産が行われていたことがうかがえ、刀鍛冶は文献と一致する。一方、考古資料からは江戸期に船場から鍛冶関連の遺構や遺物が見られなくなり、市中で行われていたとみられる剃刀や鋏、毛抜などの鍛冶について発掘調査資料は得られていない。
- 3、文献から鑄造は船場内から阿波座や瓦屋町といった沿岸部や台地の西縁に移動する。考古学の調査成果に基づくと、豊臣期から徳川初期に道修町で鑄物が操業されていたが、しだいに上町台地西縁の瓦屋町へ移る傾向と一致する。もう一つの鑄物の大きな産地である阿波座での発掘調査は行われていないが、正徳四年(1714)の大坂から移出された品目に鍋釜374,651個があり、移出に適した海浜部に位置する阿波座が鍋釜の生産地となっていた可能性がある。
- 4、銅の精錬および諸金属の合吹きについて、住友銅吹所は発掘調査と文献史料とが確実に判明している事例である。さらにもう一つ注目されるのは、OS05-05(東高麗橋31-1)で、これが『難波丸』に記される金灰吹並諸事金類吹抜所と関連する可能性がある。一方、道頓堀や長堀の西部で操業されていたことがわかっているものの、発掘調査がなされておらず具体的な様相は不明である。
- 5、骨細工や硯などは、文献に販売地は記されるが、製作については不明であり、考古学の発掘調査成果からは、市中各所で製作されていたことがうかがえる。
- 6、大量の大鋸屑は建築用材の加工や建築現場で排出されたと考えられ、市中各所での出土が予測される。

以上のように、産業によって市街地に生産の場がとどまるもの、市街地の外縁部へ移動するものがあった。鑄物や瓦・陶器といった窯業、ベンガラ生産はとりわけ18世紀以降、市街地の外縁部に移動した産業である。魚市場も市街地外縁でありかつ水運の良い場所に移動した。一方、金属関連の産業の中でも銅の精錬と鍛冶については市中にとどまった。輸出用の銅の精錬は日本を代表する大坂の

産業であり、市街地に取り込まれても、原料の運び込みや、製品の移出などで水運の良い場所にとどまっていた。一方、鍛冶は消費地に近い場所で行われており、大坂城に隣接した場所での刀鍛冶をはじめ、碇や船釘は沿岸部、剃刀・毛抜は市中で生産が行われていた。市街地が生産の場で、小規模で広く分布するものとして、骨細工や硯の生産などがあつた。本稿では市街地が拡大する状況で、生産するものの種類と規模によって、立地が変化することを具体的に描き出した。さらにこの視点で資料を整理して、詳細な大坂の産業マップを描くことを試みていきたい。

注)

- 1) 本稿で掲載の地名は、発掘調査は報告書に記載の地名と番地、『難波丸』、『難波丸綱目』に掲載のものは、塩村耕(1999)、大阪市中央図書館市史編集室(1978)の表記を使用した。また、発掘調査は調査次数を記し、その報告書リストは文末に掲載した。

本稿は科学研究補助金事業・挑戦的萌芽研究「近世近代大阪の産業マップ作成」(15K12948)の成果の一部である。

#### 引用・参考文献

- 池田浩司2001「大阪の白粉仲間」『大阪商業大学商業史博物館紀要』創刊号 pp.85-98
- 今井修平1989「第四章 第七節 工業の展開」『新修 大阪市史』第三巻 新修大阪市史編集委員会、pp.802-823
- 今井典子2015「第一章 大坂銅商人社会の成立と変容」『近世日本の銅と大坂銅商人』思文閣出版、pp.35-100
- 大阪市中央図書館市史編集室1978『大阪編年史』第二十六巻 pp.432-457
- 大阪歴史博物館・大阪文化財研究所編2015「第IV章都市の産業」『大坂 豊臣と徳川の時代』、pp.156-195
- 大庭重信2011「大坂城・城下町の鍛冶生産」『関西近世考古学研究』19 pp.13-22
- 大庭重信・伊藤幸司2015「IV-2 金属加工業」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.164-173
- 小倉徹也2015「IV-3-4 墨造り」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.186-187
- 黒田慶一2015「IV-3-1 大坂の瓦生産」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.174-177
- 小林茂・脇田修1973「第一章 近世前期 大阪の経済」『大阪の生産と交通』株式会社毎日放送 pp.1-98
- 佐藤隆2015「IV-3-2 近世大坂の陶器生産」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.178-183
- 塩村耕1999『古版大坂案内記集成』
- 清水和明2015「IV-1 産業都市大坂」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.156-163
- 清水和明2015「IV-3-5 骨・角細工」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.188-191
- 杉本厚典2014「元禄期大坂の産業マップ」『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』pp.197-218
- 杉本厚典2015「IV-4 『難波丸』と発掘調査成果の対比」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.192-195
- 田中裕子2014「大阪市内のベンガラ利用とその生産」『葦火』173 pp.1-3
- 深田智恵子・松岡弘之2009「近代大阪の借家に関する住居史的・都市社会史的研究－旧大阪三郷の借家経営者「井上平兵衛家文書」の分析に基づく考察」『住宅総合研究財団研究論文集』No.36 pp.387-398
- 南秀雄2015「IV-3-4 硯製造業」『大坂 豊臣と徳川の時代』pp.184-185
- 宮本又次1958『大阪商人』弘文堂(講談社学術文庫版(2010年刊行)を使用)
- 宮本又次1972「第二章 大阪の商業と商人」宮本又次編『上方今昔』至誠堂新書 pp.51-160
- 松尾信裕2015「豊臣時代の伏見城下町と大坂城下町」『大阪歴史博物館研究紀要』 pp.35-46
- 森毅1988「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」『ヒストリア』139号 pp.17-31
- 脇田修1994「Ⅲ 産業都市大坂」『近世大坂の経済と文化』人文書院 pp.74-168

## 引用報告書

次数	発行	発行年	名称	文献	掲載箇所
AZ87-4	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	1989	花房ビル新築に伴う安曇寺跡発掘調査(AZ87-4)	昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	pp.135-144
AZ87-4	大阪市文化財協会	2004	AZ87-3次およびその周辺の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.25-41
AZ87-5	大阪市文化財協会	2004	OS86-20次およびAZ87-5・90-2次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.42-112
BR10-2	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2013	馬喰町遺跡発掘調査(BR10-2)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)	pp.145-156
DB91-1	大阪市文化財協会	1998	住友銅吹所跡発掘調査報告	住友銅吹所跡発掘調査報告	pp.1-601
DK09-2	大阪文化財研究所	2011	大國遺跡発掘調査報告	大國遺跡発掘調査報告	pp.1-41
FK98-1	大阪市文化財協会	1999	堂島蔵屋敷跡	堂島蔵屋敷跡	pp.1-77
HS99-2	大阪市文化財協会	2003	広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ	広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ	pp.1-168
HS99-2	大阪市文化財協会	2004	広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅱ	広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅱ	pp.1-280
HS00-1	大阪市文化財協会	2003	広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ	広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ	pp.1-168
KD07-1	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2009	高津御蔵跡発掘調査(KD07-1)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)	pp.53-62
NW94	大阪市文化財協会	1981	宮城南辺部の調査略報	難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6	pp.35-48
NW97-2	大阪市文化財協会	1999	難波宮跡の調査	大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1997年度—	pp.63-68
NW08-2	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2010	平成20年度難波宮環境整備事業に伴う難波宮跡発掘調査(NW08-2)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)	pp.33-56
NW10-4	大阪文化財研究所	2012	難波宮址の研究 第十八	難波宮址の研究 第十八	pp.1-220
NW10-5	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2012	難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW10-5)報告書	平成22年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)	pp.117-123
OJ91-2	大阪市文化財協会	2004	OJ91-2次および92-20・92-37次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.113-169
OJ92-1	大阪市文化財協会	2004	OJ92-1次および93-7次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.237-262
OJ92-18	大阪市文化財協会	2004	OJ91-11次および92-18・92-25次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.170-236
OJ92-33	大阪市文化財協会	2004	OS87-153次およびOJ92-33次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.263-280
OJ94-16	大阪市文化財協会	2004	OS88-82次およびOJ92-24・92-36・94-16次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.281-314
OJ95-4	大阪市文化財協会	2004	OJ95-4次および95-8次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.337-346
OJ05-10	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2006	大坂城下町跡発掘調査(OJ05-10)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)	pp.183-192
OJ06-2	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2008	大坂城下町跡発掘調査(OJ06-2)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)	pp.181-198
OJ06-3	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2008	大坂城下町跡発掘調査(OJ06-3)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)	pp.199-220
OJ06-6	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2008	大坂城下町跡発掘調査(OJ06-6)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)	pp.239-247
OJ08-4	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2010	大坂城下町跡発掘調査(OJ08-4)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)	pp.115-131
OJ09-2	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2011	大坂城下町跡発掘調査(OJ09-2)報告書	平成21年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)	pp.23-46
OJ09-2	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2011	大坂城下町跡発掘調査(OJ09-2)報告書	平成21年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)	pp.23-46
OJ09-2	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2011	大坂城下町跡発掘調査(OJ09-2)報告書	平成21年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)	pp.23-46
OJ11-3	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2013	大坂城下町跡発掘調査(OJ11-3)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)	pp.209-218
OJ11-5	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2013	大坂城下町跡発掘調査(OJ11-5)報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)	pp.229-248
OJ12-8	大阪文化財研究所	2014		大坂城下町跡Ⅲ	
OS86-20	大阪市文化財協会	2004	OS86-20次およびAZ87-5・90-2次の調査	大坂城下町跡Ⅱ	pp.42-112
OS87-78	大阪市文化財協会	2003	OS85-28次および87-78次調査	大坂城跡Ⅶ	pp.38-60
OS88-121	大阪市文化財協会	2002	三ノ丸北西部の調査	大坂城跡Ⅵ	pp.113-133
OS89-148	大阪市文化財協会	2003	OS88-56次および89-148次調査	大坂城跡Ⅶ	pp.98-104
OS89-89	大阪市文化財協会	2004	OS89-89次調査	難波宮址の研究 第十二	pp.47-48
OS90-15	大阪市文化財協会	2003	OS93-47次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.175-198
OS90-47	大阪市文化財協会	2003	OS87-26次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.17-26
OS90-142	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	1992	㈱三和産業建設による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS90-142)	平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	pp.16-25
OS90-142	大阪市文化財協会	2003	OS90-64次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.169-174
OS91-64	大阪市文化財協会	2003	OS91-64・93次調査	大坂城跡Ⅶ	pp.275-290
OS91-78	大阪市文化財協会	2003	OS92-19次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.157-168
OS92-19	大阪市文化財協会	2003	OS92-19次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.157-168
OS93-28	大阪市文化財協会	2003	OS87-14次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.299-320
OS93-47	大阪市文化財協会	2003	OS93-47次およびその周辺の調査	大坂城跡Ⅶ	pp.175-198

次数	発行	発行年	名称	文献	掲載箇所
OS02-8	大阪市文化財協会	2003	大坂城跡の調査	大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度—	pp.49-74
OS04-3	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2005	大坂城跡発掘調査 (OS04-3) 報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2002・03・04)	pp.127-132
OS05-3	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2006	難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (OS05-3) 報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)	pp.61-69
OS05-5	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2006	大坂城跡発掘調査 (OS05-5) 報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)	pp.105-112
OS08-5	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会	2010	中央区本町橋における大坂城跡発掘調査 (OS08-5) 報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2008)	pp.183-198
OS09-6	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2011	大坂城跡発掘調査 (OS09-6) 報告書	平成21年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2009)	pp.75-88
OS11-7	大阪市教育委員会・大阪文化財研究所	2013	大坂城跡発掘調査 (OS11-7) 報告書	大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)	pp.289-300
大坂城3A区	大阪府文化財センター	2002		大坂城跡発掘調査報告Ⅰ	
大坂城7A区	大阪府文化財センター	2002		大坂城跡発掘調査報告Ⅱ	
大坂城03-1区	大阪府文化財センター	2006		大坂城跡発掘調査報告Ⅲ	

## Transition of the Industrial Distribution from the Toyotomi Period to the Tokugawa Period (Outlines and Details) – Based on the Comparison of Excavation Results with Documents of “*Naniwamaru*” and “*Naniwamaru Koumoku*”

SUGIMOTO Atsunori

Modern Osaka's industrial distribution was considered comparing the account of the Osaka guidance of the Edo period with discoveries of archaeology. As a result, it was able to distinguish to the industry to which the place of production remains in a city area, and the industry which moves to the outer edge part of a city area. A casting, pottery industry such as a tile and a ceramic, and iron oxide red production moved to the outer edge part of the city area after the 18th century. On the other hand, copper refinement distributed along canals, Nsgahori and Higashiyokobori. Smithery had a place of the production which adjoins an area with much consumption. Bone ornaments, inkstones were produced at many places in the city. It was able to explain concretely that the change had arisen in industrial distribution by products and a production scale under the situation which the city area of the Osaka Castle town area expanded.